



30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9

門口 19
3780
卷 1

理齋志賀翁著
德齋原義補訂

氏里圖書
至誠齋

三省錄

五卷

天保十四癸卯
正月官許新鐫

潤身堂藏板

三省錄序

暢德齋

古之聖人。素

衣服。教飲食。擇善言者。

固

今

使其知貴賤。奇給之度也。然則
衣食住三者。生於禮義。不可一日而
離者矣。書云。欲敗度。雖收褚。而志
於道者。名守之。若檢以脩之。方

昭和六年
六月二日
畠井春五郎
長男次郎
伏見贈

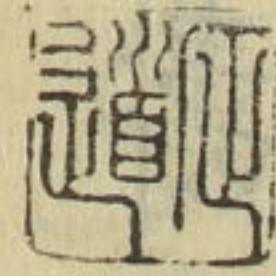
則可以免踰奇僻上立度也。且夫考人之情。少得幽息。執鵠鵠者既鵠鵠矣。或至破產以滅身。或以悅歎哉。余親生考理齋翁。嘗輯三省錄。將以為世俗之針砭。而有言涉觸諱者。故此書不刊而沒。是為遺憾。今崇文寅。官起維新之

政。以鵠鵠奢之弊。弛繖廄之念。開
之議之路。是乃不為天下一大快
事。蓋於是。此書亦遂曰公許壽。詩
梓以行之。使世人曲焉以立聖賢守
分之義。易庶幾矣。助凡教之善。
嗚呼。使先考遇彰。惠世。豈又必有
而達謬矣。今則已矣。刺家之一言。

一也。未能自禁。因叙舊事。以實其首云。

天保十三年壬寅臘月上臯
江都德齊原義正道甫謹後

潤九鶴書



三省錄序

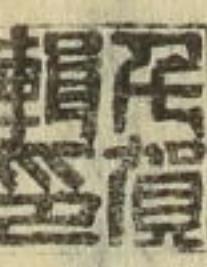
甚矣世之日趨侈靡也。韓橐以來昇平二百年。人民逸豫。衣非綾羅。不服食非珍羞。不飽居競華麗。器翫奇巧。噫。土階三尺遂變為瑤臺百丈。可不慨嘆哉。我

神祖之龍興也。身在干戈之際。備嘗艱苦。及其海內蕩平也。儉以率民。矯豐臣氏之奢極而救國。國家之靡敝。与民休息。所以有今日鼓腹之樂也。夫國奢則必以儉。方此之時。上不尚儉節。用則國靡敝而民疲極。美志賀子堪有慨于斯。乃輯錄吾邦明君賢相言行涉于儉者數百條。題曰三省錄。省減衣食住三者。不使趨奢也。

寛政之初執政白河源公布維新之政一遵奉
神祖之遺戒民將歸樸惜哉公罷政稍復入後靡之
弊苟不壅則流而不返庶矣秉國之鈞者存心于此上
以及下惟儉是務念

神祖之所以興鑒豐臣之所以亡則天下幸甚傳曰土
地廣大守之以儉者安子堪之功其有裨于世教豈淺
鮮哉

天保三年壬辰春三月江戸千賀輯伯寧甫識



三省錄

衣服之部

志賀忍輯



○衣服といふ字のへ元來寒暑とぬきを膚をゆくはみどりそ
れくはるかのなりあつてもも寒暑をざふ凌がたゞそ
そすものより常服ハ何物もが限すりもうげとも若くいは
表向の衣服ハが限相應すがく孔子を禹王を賞へて及び
そ悪衣服而致美於黻冕とのいはくよこむと禹王の常
服をゆくとしてむかて向の礼服と號じらるがやのふ
もすむひとものすり禹王ハ天下の主よあまをも常服
なとも美服か一泣へばともが限するとも言ひりしに
御ふ常服でぐ殊の外ひよだげのくわのと景へり

（一）况諸侯より以てとやれり然大丈夫するものか
黒縫くろぬいかくは衣服の美惡びあくかどふううを用るもそのあらの
ひりふま賤せんをもすむたるのむろく大事と傳つたはるも成なる
きを無道を求めふむちゆうびくふみのよもあがむ者
うわが様ようとく彼かれ詳くわうむ是を略さくべく叶は
ざる事あり孔子孔夫子を士志しし於道而恥惡衣惡食者未足まづ與議よぎ
也といま先哲せんざいの事こと小諸侯ちのしの世子せいしなどとはくも裏うら
向むか女中めのわらわの事こと育いくむかす事こと衣服のよへー小目こめを付
そば好ういなぐも女中めのわらわめにあひハがくせむたる擇拾えきしハ
時のをもとよりなすの好ういは大よつこむむりなりあき
畢竟ひきょうハ吉よきめ婦人ふじんの事ことそぶく行ゆ繩さうく持も高たか

のうの小兒こど八年の和わ日本にほんとすみる衣服いふくハねと形かたち
やのふく其家風きじふうも厚あつく重おくく見えりやのなと時の
そやく擇拾えきしがくせむくるハ被かぶくそく衣きぬ風ふうもなふくみく
見ねやすくやのすり婦人ふじんハ小兒こどのむくやうするあは
それやくを好うきて男おとことも女子めのわらわとも芝居役者しばゐやくしゃ
ウヌ袖そでをきの、やうふあくらくなむむけと見る目めも私わたくし
あやぢよ 燈前謹錄

○何なん老女おじよのききああのうのうをかくう条じょうよききらもゆふ
んん花はなを染ぬのを獨ひとりるものと紬この帶たすき一筋いつすきももと化か
既あ取と辦はんのとたもゆ黄この段だん一いつ葉はの縮くわの足あしのまちん
のうびよむむのうの革か足あし袋ふくろを毛けを底そこ下さく

○元龜のころよハテ緑の武士の妻女も家やのよ家よかなく
嫁入のよたも麻のうづかで急々肩木とくづきのよ尾うけて

うさぬを負ふれどもよ
弁伊庵孝一生林深の布
吉老詠

伊東孝一堂柿塗の布段中よりそれを除たる布比下革をすれ
しとひり四月日光に至孝板目親板との外大勢出立一あす
朝は寄合のじれに當年ハ例より不やく暑氣がよつ船舟多
く蚊よきとせんじねぬきのきのり日親仕事きいふあおの故地ゆ
りとえく釣手をつゝ釣を尋ねかねの旅よりも自由
が腹をさすへきぬうよたりのぞ枝箱で花の上ふをと帷子を
かぶとてとひりをの透るより放入りかくのやくよ會ひ
まく

寧固齋談業

○天明辛丑の冬、亀井魯が肥後やのびたりて、細川侯の政事
をもよそく久より居諸侯と遊歴し、其風民情と人付ともえり。
歲暮も肥後の風俗、密々へり。家中の事も其勤職も出對
一遊情も風俗かしら。又て、勤むに人も学校替古つあり
聊、懦弱もまゝ安てり。侍小路町方と向ふに學すよ。奉三味線
もくじ者聞えび川村あなとよある士を一度も見聞をうへし。右二事一向
無きよ。ある浦、さう曰、一度も見聞をうへし。かくまでれもるより
とならう。こ彼生え交ひて、多くは儒者なり。其業、出勤を
乞ひ。よ。袴も羽織も。形あはず。大城を十数どりよ。無元來
町人多く富饒うち酒呑も。りう。を学文も。詩文も達者。う。力
一也。急儒者。よ。おう。せう。あう。居。よ。あう。急。えう。か。於。学

のうちにひりつとも同人より止高収同人一日吉日既に
羽織で足り一出仕候が居今日歸らるべくいふや向ふ
左十段答へ今日ハ学校を試業へ行ひ巴と試業と
誓古の人文書武藝よりは一統多業の進退である
らうすここの日ハ疾も出産を成さむものもあらず
親類ぐる名代りて次モ家の事先次モ学監學頭次モ師役
の事モお詫びの前モ誓古人を人びと見ゆるまづの
業をつとむるより多く重く晴きながらの如モ左十段も猪羽織
と名へたる也

肥後物語

○また同書小版田孫左衛門江戸を肥後の士と出合ひるるは何角物
うづくけよ先役より突き立てば服制如何と問ふ孫左衛門

答え當時ハ主用不外焉と諸士一統僕約と聞ひ正月の朝礼
慶斗司役沙て足り一平日ハ一統僕約よりとて給ひ先役者モ
いふを失玉ハは富饒くと御きいたも何とさん犯後某と正月
の移りやすく御服よりとてたるより拂れ考究一きのうす
一ノリ蒲地をもとひ彼地とも名でゆる役令同人二十四年
の間まり役をつめ彼生ハ役人とな上下多く肩衣と用ひれ
ハ淮人の用う網より肩衣と化す二十四年の間右肩衣と
そく支あひて一物も

○柳營鷗が岡→社衆のうち吾妻四郎助光鎧籠の喰ふが高弟と
謂く修業で鷗くほく穿鑿うかみより助光有傳と言ふ
正久時小上意阿とて曰右大將以来社衆等年々其足等

古代ニ通リ有事ニ用ひ新造耳及ハテム者ノ社ノ定
リトあり特と僕約の法ニ背クシテ出仕トモシテノル時ニ
將軍の門を放き庭樹ニ頬ニ諸士をモテテ此處に定ガ
村落ニ住む者ノ諸士を召セテ依ニ助光を
召セ射キシム助光引眼を引シ村落モ急シ飲啄
つねのや柳營襄美ありシ出仕モ急シモト 東鑑

○何ニ又ニうちの比恩がセドモ津波年も津波をめみ
あるモ津波ニモトあるハ従古陸奥信夫郡よりの貢物ニ信州
車弓甲冑約陸奥紙武藏鎧ナシモ津波の貢物ニ信州
持モ津波一色の堅シヒツラ際立のなくそのぶるの筆モ持付
たるくさやども手と衣わなれどりふあるものふの筆で也

付セモ今モたちモ津波の今金昭寺の簾子の縁もま
あのふ桺あさくらうト古河の御子ミスナリモ榮雅
説ハ信夫郡より大約石二ヶ所のわたり平クアシ緋子のや
紺有りそきと藍シ布と生れハ従古年貢モたゞちうより
天智天皇のとする奉るト又説ハあのふトセドサシモヒ葉地
二物ニ多ふハ細うする紫シリ、指ハ一繁シタ、あのふ紫モリシ指
きモ多ふ紫モリカクちなりと右の説ニシテ質朴の阿モ
さす代わらひはのあ

○鎌倉の北條時頼のあくよ平の宣時相臣のやかニ使シテ嘆シ
吟一お座衣ぬれぬれをぬれお歌をいたすやうもとどく
とふくせ一純子の酒よ育てをすまき人静

てあらあ極の小土器よ味噌のサーサー付くると取ぬるもあ
豆りぬとも酒さかくるもふつまびるもよみくらう
時 賴 日本六十余州の兵、弓の權をわざる人ふりゆく
今 封緑の代よ生まきよ士君子のちもやをねど也
あやひ角すがれ代をあづがれい手人ハ傳ト
あ

理齋曰閑田耕葦小或々の晴きのよりて向小袖と因縁の
わら情り小なり既云即一を使ふ矣すよし又第
一ツあり内掛於二ツ八く有」とあん専ふの老人雜話ふ
葉殿家の脣に思ひ古ひての事、小豆饼のところトナラセ
盛りてあされど其が歎か上手と記す貧富

候ふと移りぬか何よりかはよりお構は居たゞ
一夏もすゝよる事
嚴有院様御代私ちお年も節その時ふ火消役の事
大うい革羽織ももたびく火よお令にかのくら
まきもおひふりもあつてふは今火消役の事
きをで駕籠の好と加へゆゑ十五二十被^ひと極^き詰^づ
出へらるる度ごとおとおと車^{くるま}居るはとせよ
すかえおもやねどうぞ食衣住并器物等の事^じを
すよはすよ、伊豆^{いぢ}珊瑚^{さん}樹^{じゆ}等とぞうてり
常憲院様時^{とき}かとく夢^{ゆめ}よりぬる今よ止^やまし
まうん^{まうん}いれ
ひれい
まうひ

即爲代美覽とは考へておもなむ。うち私の乳上

ふはまももふ附不すひ向後質素と庶民は掠大承設立る
やのせへ佔ひよし行旅に旅館なく、先中ひねど以てありも
連々やつゝ一華里と山々仕度度重ね半才ニモ、を年後
物次才よる車、安ノ船不擧身よ底本はせうへ也東、米價も
く底亦はかうほ度々向後至江戸は諸大名減ひ、年年お
徴宋價下車、底旅館はふやの價も減くマ底厚ひさつき
ども唯今ま、お考は玄米價も年より多く下焉もむ
きの、ゆくゆく上りやうのうもくトドキや安い難く、ひれ
にわづきを貨物、内緒布、木炭薪、酒油等あゝ急
用よりのゆく大う利潤五、六分に付京大坂の富高す
金元でせんがその下に付く問屋ども天下の諸物と自由よ

まへたひより合はる時にお場でさる。そんやは向後彼
米價下車より雇ひに來るものとの價より自由より下りて有る
や車存は米價と物價下りてす。いよげ士の糧食と
ア括算とく。又あは萬く。予省仕見やねども愚意及ぶ
車存は但指布等代をうけんを車にて去吟味無くまく
又運送の入用をうけ公儀より時にお場でおまうき下ふ
自由との價と上り下り不仕合抵死來す。さへ家に
侍詮義ア無く。家や車存は 獻可錄

○近年米澤侯より節儉の政を信頼にとて内紹御衣と至る
き由朝夕膳飲も一計一菜より多く先も多く御飯と付御家
中一同より御衣を取。お勤め候佔ひのう程に伝ひゆりする

一同より御衣を取。しにほども外様より奢侈の風俗とく御衣
を取。不やひ付一日私へ内閣使節候。御内膳。外様より
毒。思石はお被佔ゆ。私や上に外様より御衣を用
不仕合に理玉極む。第。西康以来美服を忌用仕事
を。君の思石。一國の上で若世話。年來美服を忌用仕事
一の上一切の安樂。その形ひや。人へ。き。の。せ。思
先御。衣服を快く仕度。苦。度。但。モ風俗を獨り。智
能。人君の情説。以度。は。下。の。の。ひ。先。の。貪。不。仕。能
人。情。手。あ。と。以。度。を。主。能。て。の。の。急。よ。不。急。よ。以。度。後。能。お。に。節。す。く
ト。能。福。一智。ア。生。能。ト。モ。下。而。退。キ。や。後。能。お。に。節。す。く
仕。す。う。き。な。い。ど。く。お。考。ア。不。交。外。様。の。ど。も。御。衣。を。忌。用。

不破より、おまけともよは東ホ御衣を悉くへんとくの箱の僕約も
お禁中お裁えどもきわめを悉くへんとくたのこ是とく僕約致す
はとくやあくべにをよは多年不ぬきとく家中のさみども食祿
やも備里上垂れと難院いと、アノ勢はまほくいとくをも付
きえく御衣きもふ用被一朝夕の食味とても減ドヤハム
トとどもは難院と枝へとすやも人君うち家の天祐へのヤ
得とくはふよう紀とくろきのふ枝るま家等御衣と共用ヒハ
中を、もトカクやうらうふ袖袖とくらべ共用被へ、六早竟
まとむ、もトカクやうらうふ袖袖とくらべ共用被へ、六早竟
表向ひのと御衣とくらべのけくろひあうとよいき外れの者も
い服致さざるも、なほ依て東ホ下り御衣と共用へて、六早竟
衣を差し付立て、實情でお立てヤ、豈なほ付納戸役サヘ付下る
トつま
あんじやく

御衣を常用致ひとく本御鷹体のうよ出紋付の御衣をま
営繕用被事ひ私アラモトモ極少を形るシ像て奉存候
一葉も以一生終右上に御服も皆一生活ぬシシテ松竹梅
トヤ上退きヤレ右シ以實ひ経ちく上下ノ被仕候執政の大臣
より一回ヨ御衣のかいを用ひ仕候志クシハ儉約を行キヤハモ行
カヌモ君上法度人の實不寛ニナシアリシハナシハシム
と御身内ハ根本立石やマク枝繁は及キハ 永日抄

○ すばる曰米津節儉くは城下遠く在ふてびとぞう歸令も行ふ
不やひよひむきわお勤いの親隱居よひゆは勅遠至一托山よ
あひはく日ひふやくよ有能明る名主きの宅よ山宿仕立せ
すまう
居風呂よへやひと有衣類で脱衣すひと萬染の本絵の織侍手

序風よ打毬けをす湯ごつひひやひで亭主ひやひなふか
そまうれんじゆもんくうふ
兼未あら木御鶴傳紙格別よ大切すすむはやめあく色やく付
はお鶴傳はすらす細有るひりせす將らを通風形様清承洗
萬お勤行を毎くひをく下タて梅以政候うはの鶴傳
山石下タミト事あらわ深い葉以写我おへ急用政下候ゆす
う北やひ依まし私よ急用ハ政ハキむざとやく無不ヤハシム
山ひの亭主家内みのと呼よと鶴傳といふて物はく候を
水御衣紙名をきく持ひ下く、行文納事、停止仕事候お旨仕
やうが仕事くない、拾玉集石の殿様のすふとて本御
衣セ多きをもとと寒以當信用い事仕合奉た今現在

さうみ もより
さざめ がせん
ぐりん もやーま
くわく ちく
ぐれん ちく
ぐ さ
さふ

トおとこをど世話キルモノと名や右本実内室婚姻の前
小本嫁衣數十と彷彿シテもあまける老臣老女など
色いろあらひ事ニヤル多モ亦是等僕約ともすハ深入
在くび子在ふの家中を扶育一一向又ソ後より作あ
され用もあくバ序かく勤めなすんまう考小自
多も綵服と用るう等あり承書あらんとの此い故どよ
くすりうそく字みゆとあるハ上京へ西へ日本事と
て縁女婚姻の事へ子是と號りとくや齋時人乃評お
せりやどみハ家中ともひづきお應子ノリモと耳袋

○鳥帽子のとハ馬うつ木古充子安子立鳥帽子風お鳥
帽子士鳥帽子かど造ア付尔仕立トモ得世の事

古ハ唯一物の鳥帽子玉く小鷹の羽子漆玉く繡玉く
者有ア其お折用松木く色く木葉もく又云素袍子
ざあれハリトハ何を急レても今一木次之の替代綴よ
リの被札見也く下の被札すもハ之の处をイ新レ
き綴子て飾すあらひも被色とちあらひも緒あらまひ等
く用ひ又名參院の被子行織と用ひく補ひあとにて
財をもくとえ毛うけ鬚方斗目の獨うけの邊筋形ア草葉
石不肩衣れなぐヤモトムヒトナリ不有ハコノ前よりの
常や子はが苔うけ日系あなど若年ニ節子の老人中が、若年
よしもドシハダギヤ
赤衣ち社までびの家を用人すばれ多も安折玉毛肩衣

まくお宿とめやほんばく有らひで是へやはいぞれ外を西郡北
ち護うち大おののあを用人すうひ役のきひたいとも
つねよ上下足りしにとあるをもすくう、衣持布政一
え諸所よき一金アじく仕てゆ湯ア火大火より先あし
前よりも有らじ古因幡ち辰家老ども呼やう我
をさじらあお上振合の衣付云算みも云次役の者
どもから肩衣で算さやテ我に有此方かくも在松ヨヤ
付新との安付ゆ内云在松村除を支と侍と以初
度上トで算さ云次役小役ア付ひ云きより正和三義、棄原
志太志山志店を支と小者士商人云算云宣寄云
お勤やいふ山志店を統中大小云ふ携手の事無云

ておふけはる代子景招よ是モ半襟アリケシセガ
一古にひとく袴ア属のうひはおれくと迎ひて
改へて家あとく是の店アはりも今や一より七十
五年をりと前ひるあり 落穂集

○脚當城よ於く其嫁男女衣招アシタヒキ前どた今や相
かうらむゆきと並び塔ノ日たのこかうるすが 但家本
落穂

捨觀極以代シタヒに於くと
台院極 大勘院極脚代までいは被和モ於くのが以役
でも改テ脚城内云被和モ猶當ふくもつて云て
さー墨のきは衣中云象ハ極別との外平脚高底云象

ちじめ残す事無て、うけたまひ用不おゆあゆく
あらはりい川とすくとせもお山に物中もとれ外わ松子変
は、上下とも女中の草とよかあしのれひまで
女中芳とやひの河の巻きのとが二ヶ刻よ猪羽ニすれ
まく二ヶ刻とお守とよめくわあと松中もとめ松子
ちやひいを、三ヶ刻とすい三ヶ枝よくひそれ
ねく墨やはく年もよかに十年、そのとがあよ
春ぬれを二ヶ刻ひぬれと一箇よのまく用ひ後口
むすびめひとともねびくとくとく不対して、けいざる
やくふゑかくとくとくはくとくとくの二三人も
おき着室も持つおもどはまく唇くわえのあ女

とくとくひ女中まで麻のかつらとヤシの髪かぶつまゆの
そよそよ革足袋でそよそよにじゆるにゆる如くあくしゆことくらす
七十年ばくううじゆる右せかづきくやまとの大がくづたゑ
女中じゆうのうわうりけあくは煙き、考の女房嫁れどゆふも
きふきのふ家あやあくい不叶、せやくふれめおな女家ふ
翁のまつまふおを父、いぢゆ肉身を乞ふとふ易くあくまゆふ
うみの範圍ゆきう卑天よりん辯才ゆふやく玄關
上うか。小林ゆうゆうかくん林海風よる春、れはいよ付
不審ふおうひきぢる有り難くおきひす躬よりなかくと
仕くまついたやいつむちゆかく御歴中やくせんをゆくもく
あさかう

はゞでと回りはまほ志の間の窓よりのぞき見る門下、
わらもすまみの有るに付て書てよびあるとくわおあ
家來時被せうのううその女のああいわあ
あくやはるのよのとけめ家來生ごゆかく
経ゆてのべすをやうふ、

現様三河の木賊はおれの時よりあ祖父に知り五万石と下
墨の手をひき上りあれまゆゆゆむくと刻傳代の事事よ
有ればやうもの底をも身力(き)へぬ房(ふさ)か川(かわ)をさかづと
御代有(い)ふ腰(こし)と掛けたる後(の)ゆ負(お)せとゆ連(つら)れ
ゆるよおまくお家(いえ)おねじの家(いえ)車(くるま)の家(いえ)
おまくの入(い)る、あるこの小(ちい)い家(いえ)屋(や)連(つら)れ

うきのまかまふ依て作のあめとば女のわやくふ
かくはをもとへ邊の町かくきうおひきのふにけとも
枝づくゑあを浦の内にまうながくあとせんざま
まのくの小まくすらしけひ不する女房ちや、経く
朝作、遙くほくほくはまゆづきま家あ方とお
ねととそくの膳手次身かほーとてやうこくは但一
まのうのやまとす洋書門とおなじとやうきくは
色くと接する機略と車くわねる店うら因通
候しむべ群れあどあ園りと後くゆくう中御等
らのとみぐろい 落穂集

○山茶花子於ニ百儀など承多乎小家のえのねまと

○向今時お火を節へ歎くもやひ不及小家志とても羽織筋布
む詰うけまく待て後でそぞりとあす育てんが若子曰
生きてちうの仕方本とあきらめの養お始くはい箇れど
うの後の養うこのよあらはれをまくとまく子細
あらはれはあらはれをまくとまく子細
諸あらはれはあらはれの育てぬあらはれをよぬすあらはれ草羽織
絆の付けるとあらはれ用し家中のみ百石三百石あらはれあるの者
あらはれのをあらはれ羽織ふ大役と付くとあらはれ

而拘よどひ知り侍し内うちか三人革羽織かわはぎを被はし候まと差さへ
中なかの右みぎ少すくなりのところ左ひだり腰こし揚あおがれ候まとる近ちかくつりに是ぜ
も周まわり揚あおす處ところ羽織はぎをまくらうひの羽は本もと羽は羽はりを
是ぜ波なみくすはい是ぜ怪あや中なかる所ところのまぐ柔じゅうらの革かわ
羽は織おりをまくらす右みぎ下しも手てきくは侍しが仰あおそくすの内うち
裏うら革羽は織おりを用もちひ持もす候まと點てん梅うめより屢たび屢たび屢たび脊せき板ばん
の羽は織おりを色いろくちゆうで波なみく波なみ中なかをまく骨ほねをまるか
肩かた底そこ波なみく五枚ごまい三枚さんまいの志しころころを付つけ拘こ魚うおをまく板ばん
魚うお旗はたく付つけ着き火ひの裝そう水みずをまくとまで折たた柳やなぎをまく
意い料りょうを具そな足あし一いつ所しょ誠まこと立た中なかややどどのききの八はら持もう。是ぜ
そのく武家ぶけの是ぜ怪あや若わか黨とうげくくとも多たく生う町まち人ひと

出であふるゆきすゆきて火ひの裝そう水みずをまたまああととややくく
かかくくののききののああ 同上

○
理齊曰近年まことに火ひの羽は織おりまで人ひとのおれみみやや
いろくいろく格だく而お拘よどひするするととははくく謀もと百年いぢふ年とし也よ
始はじりよくよ萬種まんしゅ集あつ化かくくははららののののははるるととゆゆ
ををりり知しるるここははよよくくいいくく事ことにに舊き化かくくののくくよよ
當とう地ち町まち方ほう火ひの羽は織おりももたた今いまのの様ようををりりううるるととゆゆ
答こたくく日ひ家いえおおううれれ時とき今いま近ちかくくて相あわ習なるるおおがが去こまま
時とき七しち十年とせんももままくく當とう地ち界かい中なかよよはは在あるる香か氣きをを、
油あ油あ結むす店てんももくくははいい新しんモモトト火ひの羽は織おりもも大お火ひの羽は織おりもも不ふ可か能のうののううなな名なをを始はじままるる、
ののううなな名なをを始はじままるる、
草くさ葉はをを和わいいききららひひ不ふ可か能のうののううなな名なをを始はじままるる。

西年火のと後世人革羽衣^{レザーハイ}革腰巾^{スカーフ}で拂ひか席^{シート}
の革^{スカーフ}の用^{フツキ}革^{スカーフ}は革^{スカーフ}の用^{フツキ}後^{アフターハイ}革^{スカーフ}の用^{フツキ}が來^{カミ}ハ
男女とも本締^{ボンド}革^{スカーフ}用^{フツキ}拂^{ハラフ}席^{シート}革^{スカーフ}節^{セイ}
切^{カツ}革^{スカーフ}脛^{シラカツ}調^{アシ}付^{フツ}別^{ハラフ}表板^{エクラン}ナシ^{ナシ}不及^{ハリ}本締^{ボンド}革^{スカーフ}
革^{スカーフ}用^{フツキ}革^{スカーフ}店^{スカーフ}革^{スカーフ}ば^{ハラフ}ヤ^{ハラフ}革^{スカーフ}油^{オイル}革^{スカーフ}
七十年以來^{アヘン}まで前繁立^{アヘン}の兜^{ヘルメット}小姓^{コウジン}が^{ハラフ}格^{グレード}のモ和^ハ
上^{アベ}年^{アヘン}見^{アヘン}男^{アヘン}の繁^{アヘン}小油^{オイル}あ^{ハラフ}拂^{ハラフ}ナシ^{ナシ}も^{ハラフ}
あ^{ハラフ}めうた養^{アヘン}小役^{アヘン}ノ^{ハラフ}そのとれた^{ハラフ}今^{アヘン}れぬ^{アヘン}と^{ハラフ}き^{ハラフ}
き^{ハラフ}り^{ハラフ}頬^{チーク}誰^{アヘン}など^{ハラフ}や^{ハラフ}中^{アヘン}ある^{アヘン}有^{アヘン}て^{ハラフ}
ま^{ハラフ}歩^{ハラフ}行^{ハラフ}着^{アヘン}裳^{アヘン}小^{アヘン}の中^{アヘン}忍^{アヘン}の頬^{チーク}小^{アヘン}有^{アヘン}て^{ハラフ}
その^{ハラフ}繁^{アヘン}帽^{アヘン}の流^{アヘン}き^{アヘン}ト^{ハラフ}アヘン^{アヘン}アヘン^{アヘン}め^{ハラフ}ね^{ハラフ}脂^{アヘン}あ^{ハラフ}

加^ハく^ハ加^ハ羅^ラ油^ウと^ハ本^ハ付^ハき^ハち^ハひ^ハよ^ハそ^ハの^ハ加^ハ羅^ラ油^ウ
入^ハ用^ハシ^ハテ^ハ革^ラ羅^ラ店^ウへ^ハヤ^ハキ^ハレ^ハの^ハヤ^ハ用^ハ時^ハ拂^ハあ^ハる^ハ
加^ハ羅^ラ油^ウ店^ウふ^ハど^ハの^ハら^ハ拂^ハか^ハり^ハ不^ハや^ハい^ハ用^ハ時^ハ拂^ハあ^ハる^ハ
は文^ハ七^ハえ^ハ結^ハと^ハ養^ハも^ハと^ハ和^ハひ^ハき^ハと^ハ養^ハも^ハ上^ハ下^ハも^ハあ^ハる^ハ
よ^ハす^ハに^ハと^ハ放^ハし^ハ用^ハる^ハ者^ハあ^ハり^ハ 同上

○露^ハ本^ハ氏^ハき^ハる^ハや^ハの^ハや^ハけ^ハる^ハ江^ハ戸^ハと^ハ向^ハ地^ハか^ハる^ハも^ハ皇^ハ神^ハの^ハ御^ハ
も^ハ神^ハの^ハ御^ハ也^ハ御^ハを^ハ也^ハの^ハ市^ハ人^ハの^ハうち^ハお^ハ主^ハ
と^ハ称^ハみ^ハの^ハ上^ハ下^ハと^ハ器^ハ一^ハこ^ハき^ハ一^ハお^ハと^ハつ^ハき^ハ政^ハ付^ハあ^ハく^ハひ^ハく^ハ經^ハ度^ハも^ハ
安^ハ永^ハ四^ハ年^ハ八^月十五^日市^ハヶ^ハ谷^ハ八^月の^ハ家^ハの^ハの^ハ僕^ハ初^ハう^ハ一^ハが^ハ
この^ハ家^ハの^ハ行^ハめ^ハト^ハ紀^ハ二^ハ年^ハの^ハ御^ハ拘^ハも^ハう^ハ拘^ハ也^ハ
致^ハ言^ハま^ハる^ハも^ハの^ハ紋^ハ付^ハの^ハ三^ハ五^ハか^ハ麻^ハ下^ハと^ハ青^ハ下^ハ一^ハ様^ハ安^ハ

居るつづく一肩こりきで又ゑみやへまづら前年は神の多き時
せひごとくをす
藝能事あらわい女のかゝりむよ上下取次ふすが今、初めうそを
いづく
衣被小狐ぬと嘆じたゞきは時より御身よりあくまきの華
あふれく天蟬の祇端さとの衣服と見る天明の度漸々とさ
えしよえんき
三社祭現のみあ小天蟬の黒絹を冠て一ちひのうゑを病
のきみの因みりとまふねども今の付ふきて、女四んた
へじう
手口とけふ本て復せば屢のちれ跡よ天蟬の祇端用ゆきしやまと
のや
あえぎよ
有ちる行の郊向待候小袖と云ふ一木袖と文紗で画一
茅紙ひり印をいよいよ者の方ふトたれしが今、かくま
きのゆゑとく人づふも

露木直信詰

○淺井一秀曰た店舗の右に土人や侍と云ふ木榜始て爲る時
尾張敵紀伊敵ひつゝあらんをばノ善清場へひか
おむをのく革のひ立附と名づれりとも 落穂 集考
○砂丸る場ゆゑひるたと名づれりとも
脚入庵のとよしるてひ侍のうち往來てひうん抱なまつてす
青柳侍四郎とやひ小姓立純子の袴とよも役立弓とよも幼子
兩羽織敷坐座足綺る本履手や人よ長柄ののうりさ
さき通すけうそのひよ敷三重巻腰引ひくいふせ
き立本袖羽織よ手ぐいとひ歩行きも捨二三人生ふ事よ
法身もあつけうとひ筋そぞれひ道ある小筋毛毛の二本の細川
御中や忠無初めよりはうき方すとるわるーがのの甲斐

ぐくをみよ武手石のくらむ身の政と木御羽織
あがきはー徒士のきのをハ鬼の子の様もうて大物つき
無くも利後すよのとせ武士を終小切茶ニキツマサをも極侍四郎
うくすき立中に至是袋アシガ木履モリも柄のくろくまにー
かけた物拘モチも能あす仕アシうみ下人アシガ苦惱シラフは立主の
實ル思ルが都ミチとくにけ、ま極めマタケメが仕形アシガも恥トモシに侍らスル 紀公言
○うそれ數イミカまくねきマクネキ十三のうた事アシガの見際ミテの見際ミテ行錄
よう赤イミカをうりーその一ツアシガで十七の年アシガ迄アシガより
よす生アシガ詠アシガおも縦アシガ像アシガからアシガせあくまくねのかアシガ縦アシガの
かアシガびアシガ一アシガややねりふアシガはやアシガふむアシガしアシガ不自由アシガなり
でおじやのアシガを食アシガをと喰アシガふとくすアシガハ蔓アシガもなアシガすアシガお食アシガ

○のふるもあつて余時の若アシガい衣類アシガのうのゆふくうを
そー金代費アシガー食アシガ色アシガくれぬアシガりて多アシガくうにづの
かアシガたアアシガくよアシガてそぞん相アシガのゆばアシガふもあくうだよお
ほりくふはアシガともよお相アシガはアシガきしと おさんアシガく
○今アシガの幽篋アシガ小被箱アシガとよ蓋アシガありを世アシガの制アシガ律アシガあるくの始アシガ
う被二行アシガと食アシガせく衣被アシガと被アシガておやくと不役アシガれアシガふと
○被子篋アシガを取アシガてあひて要アシガく爲アシガふきのをきく第アシガ取アシガ
モ本信間アシガ子アシガ私アシガ子アシガ制アシガくアシガ者アシガあるとこもかがり幽篋アシガ
篋アシガの制アシガふ入アシガく金箱アシガで以アシガて作りあるひハ文経アシガとかへて多
教アシガと一つアシガ三アシガ四アシガ五アシガ六アシガあるひハ漫者アシガの先アシガ子アシガあるひハ
漫者アシガのほアシガすあひ此アシガお子アシガ多アシガくの法式アシガあり武家アシガの量アシガす

とくに多めの人も多々を持てむる流俗ふ化せられども之經濟
○ある人嘗て神の形を絶形ノシテ又モ高名ハあらず此掩野氏語
家ハ食後子あらずとも渴みハすれを被り少くまづき子あらず
三毛暖ふまばら食ハ殊儀子何らずともひびくぬ
バナ一朝も鳥小色形くとぞ覺あ神ハナ
○むり一四月により伊勢縁子とて板子とて賣うる
僕の妻がわどしかひじらと縞ちよとて賣うるくの
うちの行ぐ所をかひらもくらする縫も縫て
是す僕の妻女あらぬし近い奈良半幅また縫後縫を
りづきもくらする縫も那用ひし縫事もくらするじよくおもむ
るる羽衣用ひる縫子を縫縫子を用ひ松葉古物語

○むり一東方息女方お神社仙閣や參詣う節ひまげ繋
代はハ上手でるる一女中の帯ハ今織盡入る幅ハ三寸斗
射め縫元を右通の帯もせんあする一鷺女
本珍金八百本珍金糸八織入る帶羽用寛文の
ちあらうよつて一帶比巾廣く旅延窓のひちう巾廣く
旅延子三ツ割ちきもす丈丈絹ふねうと 同上
○都風俗がいふむりえひす全吉郎吉右近源たが女
うてもやらせ一折りあ拭小ひととて縫切をかぶる
女ぐのところ云ふ今はいのきのり仕あへしむ洞をあく骨
そうちらへそきこ聲を極きかくらと名付くのあきら
うすてなきや云云 近事五年の事也

むくの女の茅の暢三すうひの縁ざく式すゆどもさへ

のちの事、悟るにあつて、御言葉を承り、

○唐の治を嘗て禹王湯王文王武王成王康王など、

天道をねそきる 衣食をかづくば 畜居を斧相ふ

天下の人民が安穏小治をなするより四百年六百年或そ

八百年天下れども子孫繁てありを後周の世の末よしとす

君より人畜おぞを極きわめきわも智惠ちゑあらひあらひむがけがけ天道てんぢうの理り

とま
を喝つた。おひに義の道をもつて衣食は食糧とする。家

居てもども、此方の苦しみを多くの樂みを

あさくらの一代二代を不遇ひゆふと 本作錄
あさくらの一代二代を不遇ひゆふと 本作錄

の封地三十万石よりひそかに女を従ふ小袖

字
じよ
ゑ

たゞ一ツの、ゆづらえや、古びて、うは女閨門の、すゑゆづらえ

士、告々父君、行へ新あらば調さんとくは參敷る許テば
ひまえさきそき

は女、^ミさき、侍^{マサニ}がヤテぬあるべし。とて、^{シテ}ひ間でねまき、^{シテ}い

少翁を考へてあとも士某うげりて言へ
かと一ツうきいづり
えま
えど
ル一き

多うよ、お召めのものも云わず、ばかりに顔色

此で御うるわしくと急ぎ申し候事
上あちゆけまことに人を仕向つて時
どきの士京がおで

上在是所也。此一作也。所字是，而不可之。其一也。其一也。
舊傳多誤爲也。向葦之書。而志不存矣。卷之三

借るつとよきはまほくうやのむ 間田耕筆

よき
タハチヤう
ダム
モ
ウハ
タス
タム
シ
おまき

とて常比衣役のものを「大羽」と下ふすたるをみるが
冬うへてかくまう上の方もさきをねり、かくと連び四季考
冬の終はふさんなほどの、おゑいあー泡酒法拿のとうが
きをや有つきども古法でちくまく貞活を人もおゑいで冬

の季わせること 近代世事談

○ふとんの庵とくぼとたる家度と今とふとんあるが今の
ふとんの食とつまることいづらよひうへばやもうふとんと
本物のよしらざる所あひ庶人の冬の衣役ふら布ふ簾芦
の種とくとて入るをうへようふとんの名ありふとんす
圓ド 蘭の種でまきくらふ伝ふとんの名あひ古き
夫へき蚕絲でさくはく絲よりあきその食なるべく

古たふとんまなゆ、譲り、とぎたとと 同上
○綿ぬきのゆむり、今のこと、四季折々の衣役なまく
きとてぬき給ひ、またとてにをかくとく縫ふ衣といふ
今りふむことじこ 同上

○太平記云青砥なまくは、本仕し、も小川も織寄て持
たる絲と拾文玉はげ、滑川の筋、も小川も織寄て持
すふとくの大名といふも布のひの筋を、革とく筋もと
むくろじ紙付うり今の中筋の七筋とく筋も 同上

まくろじ紙付うり二才の童ふう弄う巾着とく筋もとく筋も
の仕あー、なまくはく放糸の玉代押絆、とく筋もとく筋も

をやうやく服をもよおるやうがまでも服をも歎く無
その布種のものとれども縫きのむかう數々多をほく
たゞはぬこの優士十鎰ゆうりゆう称いも是すら妙
物とも謂ふべし世の中華装を好み金銭といふら
小費一付をねどうじ

○太平世中比奢比慾もわざと持てたゞらじむ取あふる
なうのものと評ひ武士方へ極ふその下に本物合羽で
足もぐらひ町人の様に旅車衣ふ百千石をも
ハ作の中小姓の衣金羽をそし一木羽金羽を西持せら
家老用人いづれも當時の小きの中間半女半女まで本物

合羽代着す世界うちかず立派八年場町市村竹三屋貯
京都より女うる山木本辰之右は御身世と縫おどり
をうる木世ふ名をめすそんに小本辰之の御縫商うの
富士山の木地主うる御城、城く織本の織の小袖姿紋のきく
をうる今ハ金織童縫のたぐいのもあくね唐おどを
うる古ふかく茶葉を穿ててのうえ縫時代よりの者
諸葛本よ室の縫ゆく故ふとせりうちむけたのう下
い勢ひかく次第くおれどもまうし早竟室縫の世す
はくはくをうるす夢よ見る衣服の破きごれば、里もとお仕

○士 元正間記

のとれといふも身披す用たるべ一か冠をふうん御の松
はくろひちうつぐもむり賤湖天皇僕約の接を方々
志をすんとぞ一め時平大内はくらをぬひくら河の時
大臣補年と弟イお膳本ノ子敵上に仕やう射一を帝代
小内院の後よりちうく小内院ドそれもふく事色高きと
時平でぬあと宇也仕代也うう御ざわくいはくと人御あき
ばくえくみちく僕約代ちうとまの右大内射箭のと
筑後守俊英を承る者ふ小袖十幅セ若一わくと射箭
見物ひづく坐り服セをあくう小袖の腰をうそもて
佔多の岩瀬を奪ふ太田平左衛二郎小武小長ドくらすでゆく
文さくわといども僕約で用るが家富多くせあるを

○紀伊守安達と左京大夫少く浦一中行は終ふ
折おす今汝が祿ハ榮がたぶひふ及ぶつや又才あれを
量船をよしにすも華美御好ニ僕約をひくと経神産を
用う法をもくとすなりと大おもじりいと一參くの御候の
業すもきと紙すくたすくあて消しゆくといては但世僕養程と
足りよつもみるすふ格齋なると僕約代ちういふハ根とと經ハ
後漢の馬伏波りいと守錢奴の事文 武訓

○紀伊守安達と左京大夫少く浦一中行は終ふ
安達と一中行とめくとひくと輕き下船せてもすでも仁慈城
ありゆくあひ多ふとぞ厚恩とおどくわりども難考
きが傷つき勤もあくと曰く既子角のうれ留せほく
男上の令と奉ての際子くら歎す無きと歎役をすて

○多歌殿より少室山へ召されば、やううきのもの、いはれを聽ふ
感じゆひさあく、大音と旅音とて、あつて是まで何程の
懶りやと君あくまにたゞ、ハ景也て十鈴のものあく、ちハ御
づハ中間ともかならせゆくも二鈴の臺あるべ、残りの二鈴
の中一玉まで君の口入神、けりれ意子脚本よもあれと難
波の多難の事、サツつゝ、セウホシと仰ぐから、ゆゑに一日於
古事記の意をと飲食し、そもとあひだる年日、本筋のね
どと用ひよひなうや名の先筋もす、甚きのむりなくと老
臣うへ難き御り、多りよす、これハ僕約よもくべ書寫す
たりたれど多くす、みすく五重ノ、この作有き耳袋
○成瀬小吉正成、西郷小姓をほとめ、と見ぬ事、小本原おきの

松りてらか称の小役、子麻子役を付けて、うへりのひ深く
うへりを持へざりとも、隊の御番兵の、矣、一ツアリとて、さる
後府沖城以降、隣の、とて、小吉の、よも、人を下知、するで
神居の、覺悟、小吉が下等、とて、うひの、を、からとすく、仕あ
一ツアリ、御、内納戸の、御の、うひ、御深の、三割、を、一筋、終り
とも、今、彼家、小持侍、ふす、 成瀬正成傳

○むり、女の小を、操振、十五、六才の女、いその、御比、を、廿四
五、六の女、いその、年、お熱の、きやう、四十、才の女、いその、年
が、うの、も、かう、三十、四、六十、ばかりの、女、の、後、おむじ、と、う
と、位の、操振、を、思へ、うひ、小も、を、かへ、位の、操振、を、思へ
常の、恰好、を、年、お熱の、も、か、も、ゆゑ、ふ、人、十人、ほき

立あらへをなる小小せでの持松葉の松子ひづる松子
老若中年い鳥代りす／＼かう／＼が年四十の才の
きゆも十七八のやうの年四十の女も老若も皆那肉
筋の紅い火丹後のみよ／＼役はものさへ身地小袖
お帶とく度をうむむちる小あらも／＼とあ／＼らも
やうひと牛のすゝみもわもな／＼うれくか老若中年皆
一振りとあきの女ながらも黒意なくうれんよねをもるを
小袖の紋付を魏／＼の類のありいとね松女の生／＼わいじる
者たの女縫のあら小枝でやまくね松女ちを魏／＼の行の
軽を思ふつるの女と風うらづよたえなり帯も身の女の
事にはさよれたれ松女いとく度の帯を／＼と身もりとあ

金とあらへ／＼小今の女松女の生／＼まね
緋の影の小そで幅度の帯かな／＼とあらん生／＼似あ
着物のあらがな／＼ 古老物語

○はくえ曰上古の衣裳楮の葉よ絹をかく乞巧奠ふ備へある
あや楮の上古の衣裳楮の葉よ絹をかく乞巧奠ふ備へある
とく葉小衣葉の葉を脚衣とひよまく衣通始むとぞ其あ
今も衣紙のあらがをソテとくふまのとからをスソとよ
がふ楮の上古の衣紙をこうろし上古蚕織もいすく委ね
ううううれにこの楮の皮を剥ぎ打糸くげをく裂して
ねくね／＼衣とくとす時ハ楮の皮をイフと麻ふ麻ふ

ころもおれまく用ひうる麻のうらたきのうせ、朝の
あさきう麻堵アサとみ付アサもそのちもきらうぐ本席カシを

堵アサよりまた候アサ加堵アサを本席カシ換カシてよし本席カシニ本を
イフと云和訓アソクを候アサる今ふ神ヒミツあへ幣帛ヘイモクとみか麻堵アサ

すもくらつる候アサを掩アシカシ故寒ヒシムから旅アシカシる

○やまと日神代ヒムカタ堵アサをぬとあはく神ヒムカタてすの後アフタの後アフタ
穿アシカシと製アシカシくとさうぬとくの古アラシと旅アシカシも人
をぬと袋アシカシとてふくろをあらうと申すみ色アシカシのうをこうす
某處アシカシの數アソシを交アシカシへきくお行アシカシ山の場アシカシあういアシカシ山川アシカシを
道アシカシ船アシカシをあらう車アシカシ小車アシカシ馬アシカシ船アシカシの事アシカシを移アシカシめ
すくら今滿坐アシカシよ石氏アシカシと唱アシカシく祠アシカシの事アシカシをむアシカシ通アシカシ

○祖神アシカシうづアシカシ一アシカシ家アシカシの神アシカシ御アシカシ御アシカシおけ度アシカシハめきもどりてアシカシす
旅立アシカシの伴アシカシあらアシカシ棺アシカシふゞアシカシと申す死者アシカシのきうちもあ
袋アシカシとばら定アシカシ袋アシカシと申す者アシカシとすくアシカシ定アシカシ定アシカシと申す
天堂アシカシの神アシカシよ乞食アシカシする所アシカシあアシカシすアシカシ同アシカシおアシカシ天アシカシ父アシカシ親アシカシ也アシカシす
乞食アシカシと申す法アシカシやうアシカシる

○やまと日下アシカシのす 堂上アシカシの上薦アシカシの上アシカシ下アシカシ下アシカシ心アシカシも
下アシカシ下アシカシ下アシカシの御アシカシし宿アシカシる時アシカシと喫アシカシるとてこの御アシカシをとく御アシカシよゑの
辞アシカシす身アシカシ井アシカシ年アシカシの下アシカシゆかアシカシいふすりあるも
また御布アシカシてりて男アシカシの下アシカシ下アシカシ下アシカシふたすりのみ
また御布アシカシてりて男アシカシの下アシカシ下アシカシ下アシカシ下アシカシふたすりのみ

女鼻禪と云ふ。御弟とも云ふ。おきの腰。撓鼻禪
は言ひ人の肌をかづけ。禪のめで制。日本ぬく。やくら
大。小。言ひ。法華を牛の鼻よ。似て。うかうか。あはる。
撓。牛の。小。言ひ。女鼻禪。いと。き。あ。ま。脚布。うか。像の
うち。ユウシト列ス。女鼻禪。いと。き。あ。ま。脚布。うか。像の
そく。ゆく。やの。し。女の前を。れり。ふから。布二幅。ま。が。二布。や
い。よ。の。う。す。

たの。く。ゆ。み。ぐ。わ。相。の。も。う。浴。く。れ。と。ひ。て。く。ら。女。い。き。の。
く。ら。、鑑。禪。と。か。く。な。う。ほ。行。せ。り。思。曰。女。の。う。を。薦。ふ
き。の。を。湯。き。と。く。ふ。む。女。の。湯。く。へ。ふ。も。あ。で。り。く。く。び
は。や。の。を。く。く。あ。く。あ。ひ。く。お。の。ひ。湯。う。き。と。く。く。さ。く。
く。ら。ハ。今。信。ド。テ。ラ。と。く。

○ ある日天正の後高田安房守昌幸。浴。く。れ。と。ひ。て。く。ら。女。い。き。の。
本。浴。の。打。糸。少。く。す。に。う。ら。く。を。う。く。人。量。を。知。一。め。笑。ふ
安。房。守。ゆ。う。いた。く。よ。糸。で。ゑ。う。も。人。頑。忍。く。う。用。ら
立。す。此。魂。を。く。る。べ。十。度。も。腰。と。も。相。み。正。宗。と。く。と。
世。人。の。本。浴。糸。を。ゆ。び。う。と。浴。打。と。今。の。代。い。大。小。の。柄。子
本。糸。を。用。る。き。の。様。く。な。

○ 附。縫。手。の。士。十二。月。の。せ。ま。お。う。き。方。不。附。う。ら。く。引。着。の。や。く。
吉。風。く。き。と。正。月。の。役。小。の。一。糸。小。そ。で。傍。用。ヤ。度。や
け。り。う。を。重。呑。よ。家。お。一。つ。あ。う。で。い。お。く。済。と。拂。糸。浴。と。
備。を。そ。す。空。と。と。お。の。よ。を。身。ざ。う。糸。を。持。ば。方。も
替。り。う。一。但。子。持。筋。も。る。城。を。ち。く。ほ。る。景。と。も。よ。く。ハ

○廄

田舎士の友のひるいのぬのさうりもを袖引く笑へ
ちき、高利三倍君子と歓喜世の昔も育はるや
橋りぬた清胡に執政のとれ敵中少く妻の東みや
片え方く休息ふや下肩の小袖をぬきて坐席
汗をひけの下着で株干にかけ下りる小胡にの向
こそてうち背の下り縫ふ立つるをむろけ重ひ若一
ひき、我れすを引る老女小敵中も仕て下着に縫ふ
けよ、うつほとゆくふ充女云時猶うきたのがやく仕あつ
とも象は一生も放り不やひと食ふとそぞよたるハ御奉事の小
旅まくいでも今の中ふうるをよすとらさんとす誠に
風俗まくす予がおアねうじにまでいわねん人まくきの性子

一三二

同上

○根岸祀め姓六義原名もち彦と云宝廢形わ安永天正寛政文
化小猿々狂歌の人口多く文化の未熟ハ旬月一月えくおま
えうきりぬやかの歌紋也の同の外子ガ持者えよ。かまつても
持手の附着用の上手小袖あくごくともと柄ともうれしく
深あまつまどろみ用ふすはれあくごく地の目ぢく

吉見氏
業記

○音木民好が捕らえられ松倉伊賀守就吉
が考へて、民好の行をえりておああんが根の根
をかわうやくまをむすび、ひきの身を勿体なく
さばく。あらんやぐにあはれども時代の大めらたう

明君達微錄

○神君のおニミツ小姓ちやう衆しゆの緒はじ演えん用よ御ご舊きゅうの以ひ終まつははかま
上じやう演えんあありりととももききいいののややききののぞぞととはは尋さああくく衆しゆすするる
下しや演えんよよりりととももききいいののややききののぞぞととはは尋さああくく衆しゆすするる
そそももねね詰づ持もりりふふでで志し用よ致すよよくく天てん下げハハ詰づりりん

でもうこれのきた船をうるをでかくまつたる天下でれさんと
もやどての船のかい船燈を被りだらうと 駿河土産

○古紀久も奢はらば一禁ぎくきし事あふ
貞任宗任係役でたこくらうに類義の御等小近江酒
の位人日軍のた部とひふきのつるきの、のあうちまき
黒なりお義とくまをと換りいあくしておう船を
あう船をすきで亡きはめくをもびとさきも
後月の事にたれとぬお籠ではくらうきの、室
味の味の味の味の味の味の味の味の味の味
でなづく器の料ひとつお義とくまと先ふ相なり
おもてがくへかくへと見すがくへばと次の日小い思草穢

のあうにとおたうお義とこそをとておとを佔う
お籠小たうば費をとおだへなりとよに郎あを
枝枝をとおちのうすくう枝を歌ふむひと云ひ安へ
と佑あましと

○大河内金を漁業中伊豆ちへと通ふれあひ向あひのねり
さむく老人のうなきは浴巾でとおれと伊豆ちあい
さやうれーとたたうては免へふとろく古き本海
浴巾をわーかゞく放やけまだに伊豆ち小姓ふや舟乗す
御面の浴巾をくすめく十四也あよとほうちの見好い石
さくさくとおけ船をとては自らの頭をんをぐ
かせかくかゆふへと船着し去歌のう歌をうるいお供も

きぬきのしかづく居るも人すをへどぬ、やひ持きと
詰様なりてかづくともも多量多くこととすらふれりま
せうるよ

智襄後鑑

○仙臺城下の町三里四方あつて跡の赤松昌平をあわせをめむ
大たゞく大名の居を設で大名小政をまわすと所相成り
之貨朴みく伊達の門家を中老の歴々の伝食といつて
仙臺へ先城主時より本城を移のようう付上平と名を況
年のみのいはば本城在彼なり要くも女中あくと御彼
のよ／＼大ちのあがく／＼小袖をなまと 太平秘覧

○世信安神の名あかく明織や称するをかを名の爲國太
暉を按むる小弟久の共孔之廢公卿大奇窮／＼終に

衣被稠度不意お任らまし勿端車もいよ／＼不隨意
衣冠未嘗の階方も歩行／＼終の身終の彼小唐様の蒙
らんことをいとひ詫ひう衣冠をせば上明衣なみの彼で
上疎歩行／＼身詫ひ通彼と云はば此上疎のはずの地行
をわくもと詫ひが彼れと称す彼の身に持て熱氣もつ
呉服をうれとくもも禽の羽翼とぞと訓むもとお家ふ
被るやの称あく羽二重とくももひ石絹の念でひく恒の
緒や二重合せ織／＼ことよ緒とりふ称くも服二重なり故
上ハ及樹の名あるがゆ／＼端折相織の被継多び是に信用
いかゞ／＼織古の特社を施すが如くて皆く奴婢をもめ
の輕きをもてるより襄小あらわすとがす一向宗廟被

衣もとを繕ひて襲の故寧あらうありまふ等持院
尊氏は披折小袴で忍もとゆを初參候ひしら御簾の
邊披折をあけよと袖小袴がのり肩もと袖す矣
そ一向門徒と辻打放やの囃子の通りに詠じるを
是か又陣羽織の通披の意より言こまきと
昇進のれを歎きもときす。さる小役へきのくわ
すと民間小袖を披折である事がとうと陣羽織を
の跨ぎとす。東牖子

○井伊揚船源忠孝大坂を除きのと即人をあきせ一木面す
隔きくゆゑ正月の松子を守り候く後刻、忠らきなる小袖
ニツケぬふとあくちやらむじとて安藤忠カニヒ

袖をきくひふはりえあケ松をりと見ゆまのニツケ
家来を一見習をもとて常刀よりおとせ一小手で
をゑく草袴

神君の脚あくあらきとなり或老人のうそり戰坐の
の衣服の質素なれども漏れず小足がむ鶴川た邊一益闇東
管船を一見駕小舡を小袴お裳面のたをす某
今一ツある衣披折候すと浅いまじ赤裸小足袴もと
待く袖をきくとあや活字傳つて忠孝の衣披と拘りゆふ
をきく若望のきくと符合したるを後奉事に及ぶや
玄披折と駕小舡を之の以てては駕残車の是風りと金
銀利倍のあ語は士の恥ふるるを語る所に明良洪範

○松平伊豆守信綱曰くお仕へしに裏付の上やるるあやかし宅
吾くもんじても是をききとおやうせん人のあらわし
彼とうまきめのこか仕へ恭教をなぞとさひなぞと
あやをねづかせ衣被とうふんはせう恭教を忘るづくら
家あたかくのあやく勉をよきとた勤をねづかせ

といもき 同上

三省錄上終



